科 目 区 分：教科専門科目
授業科目名：器楽アンサンブル(1)(3)⑤⑦

オープン科目としての器楽アンサンブル

音楽教育講座　井上　洋一

１　授業の目的

吹奏楽の形態による器楽アンサンブルを通して，各楽器の基本的な演奏技法を習得しながら，統一された音楽表現を実現することを目的としている。また，楽曲解釈や指揮など，合奏に関する指導法を身につける。

２　授業の到達目標

① 吹奏楽に関する幅広い知識を身に付け，選曲や演奏指導，学生の指揮に対して適切な批評ができる。
② 吹奏楽の演奏を通して，木管楽器，金管楽器，打楽器それぞれの演奏技法を習得するとともに，実際に合奏を指揮し，適切な指示や全体のコントロールができるようになる。
③ 学内外での発表（録音も含む）を体験し，協働して作り上げる音楽表現の醍醐味を味わう。

３　授業の概要

この授業は，吹奏楽の形態による器楽アンサンブルを行っている。器楽アンサンブルは音楽教育において必須の表現形態であり，音楽科教員には，金管バンド部や吹奏楽部の顧問としての資質や技能も求められている。演奏を通して，木管楽器，金管楽器，打楽器それぞれの基本的な演奏技法を習得するとともに，合奏指導の在り方や指導者としての資質や能力の向上も目指している。

４　授業の実際

(1) 授業対象者の減少に伴う危惧

本授業は，学校教育音楽専修と芸術文化課程音楽文化コースに所属する学生（以下音楽専攻生と称する）を対象とした全学年合同授業であり唯一，器楽領域において大編成のアンサンブルが実現可能な科目である。しかし，学部組織改編に伴って，授業対象者である音楽専攻生は数年前のおよそ半数の50名程度となった。必修科目ではなく，また，未経験者が技能習得するまでにはかなりの時間を要することから，実際にこの授業を履修する学生はそのうちのさらに約半数程度である。近年では，標準の吹奏楽を編成することがむずかしくなり，昨年度の学外演奏会「楽友会コンサート」では，吹奏楽をあきらめ，少人数グループでのアンサンブルを行った。

(2) 音楽専攻生以外によって成立する授業

かねてから，本授業は教育学部の他教科専修・コースや他学部の履修者も多く，履修者の構成は共通教育やオープン科目に近い。そのほとんどが，中学校・高校時代に吹奏楽部に所属していた学生である。彼らは純粋に「演奏したい」という高いモチベーションをもって授業に参加している。また，個人で楽器を所持し楽器の基礎技能も既に習得しており，本授業の運営にも大きく貢献している。2013年度前期の音楽専攻生以外の履修者は55名中19名であり３割を越えている。（専修未決定の学校教育１年生は音楽専攻生以外に数えている。）

(3) 授業実施にあたっての課題

本授業の目的はシラバスにも示している通り，演奏技能習得や音楽表現の楽しみを味わう他に，指導法を身につけ音楽指導者としての資質や能力の向上を図ることである。教育学部のカリキュラムにおいては，むしろ後者に重点をおきたいが，音楽専攻生以外の履修生にも満足感が得られる授業内容とする必要がある。選曲，授業者と受講生，受講生間の連絡や理解の図り方等について工夫を試みた。

(4) 授業計画

授業スケジュールは以下の通りである。

第１回　オリエンテーション，バンドの組織及びパートの決定
第２・３回
　基本的な合奏および合奏のエチュードの研究
　（毎回継続）
第４回～第９回
　合奏練習（授業時間外のパート練習や分奏を含む）
第10回　中間発表（録音等による自己評価）
第11回～第14回
　上学年の学生による指揮・指導法の研究
第15回
　最終発表（録音等による自己評価）

(5) 授業実施にあたっての工夫点

基礎合奏は，毎時間，継続して行うこととした。初心者が，経験者との合奏の中で，体験的に基礎技能を身に付けさせるためである。音楽専攻生は読譜力と耳は十分備えているため半期の間に，簡単な楽曲は演奏できるようになる。

前期は全日本吹奏楽コンクールの課題曲を主に取り上げた。履修者自身が，吹奏楽コンクールに参加する場合もあり，夏休み中，帰郷して母校の指導にかかわる場合もある。課題曲は，演奏と指導法の習得の両面からアプローチできる。

後半は，音楽文化コースの４年生が教育実習等で授業を抜けることもあり，指導法に重点をおいた。３年生の指揮法を履修している学生に指揮をさせるなど，学生指揮を中心に授業を進めた。

また，他学部履修生との連絡，基礎合奏用の楽譜配布，演奏記録（録音・録画）の閲覧のために後期から本格導入が予定されていたMoodle2（試験運用）を活用した。

５　授業評価アンケート

(1) オンラインアンケートによる授業評価

全15回の授業実施後に，PC，携帯・スマホに対応したアンケートであるREAS(リアルタイム評価支援システム)を用いて，以下の14項目のアンケートを実施した。

質問４～12は，４：そう思う，３：おおよそそう思う，２：あまり思わない，１：まったく思わない，の中から最も近い考えを選択させた。また質問13は，授業時間外の練習時間（週平均）を具体的に記入させ，質問14は自由記述とした。

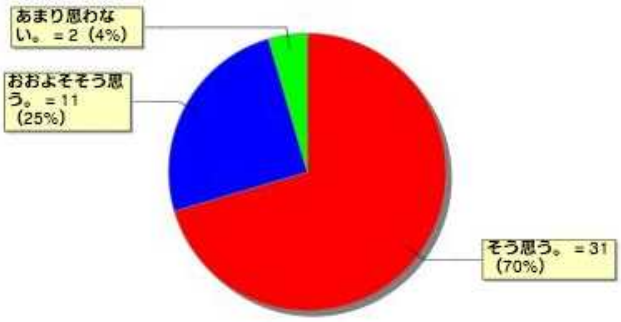
1　性別
2　学年
3　所属する学部・課程
4　シラバスにそった授業内容であった。
5　専門科目として「器楽アンサンブル」を学ぶ意味が理解できた。
6　各回の授業の目標・内容がわかった。
7　教員（指揮者）による演奏解釈や演奏法，指導法などの説明は参考になった。
8　吹奏楽の楽器の演奏技能や指導方法が身に付いた。
9　吹奏楽に関する興味や指導方法について関心が増した。
10　パート練習や全体合奏を通して協働して作り上げる音楽表現の楽しさを味わうことができた。
11　LMS（Moodle2）は有効に活用できた。
12　後期も器楽アンサンブルを受講したい。
13　授業時間外の予習・復習（パート練習・個人練習含む）の時間は，週平均どれぐらいか。
14　授業ついての感想，よかったところ，改善したらよいところ。(自由記述)

（回答数44　回答率　74.6%）

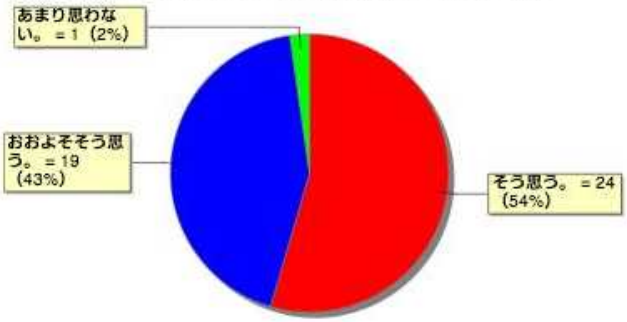
(2) アンケート結果

予想していた課題や工夫点の効果に関する質問についての結果をあげる。

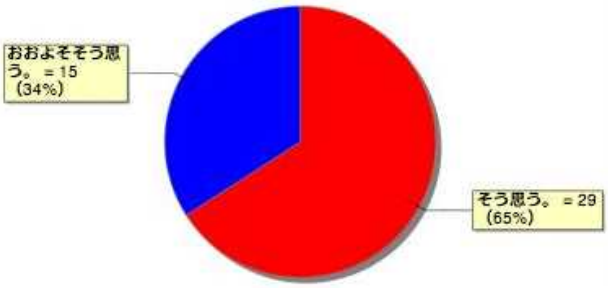
専門科目として「器楽アンサンブル」を学ぶ意味が理解できた。



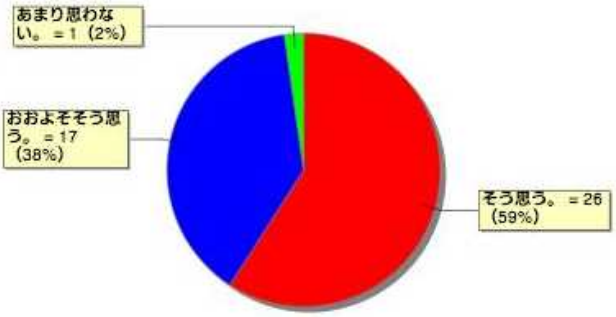
吹奏楽の楽器の演奏技能や指導方法が身に付いた。



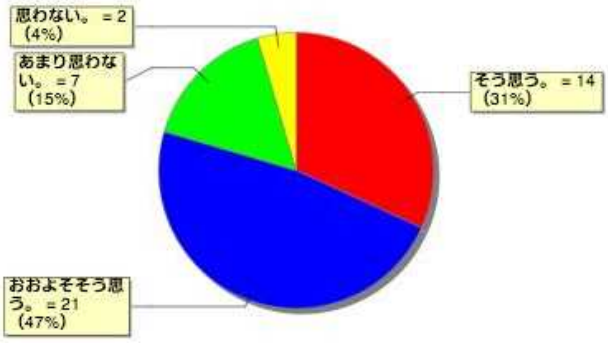
教員（指揮者）による演奏解釈や演奏法、指導法などの説明は参考になった。



パート練習や全体合奏を通して協働して作り上げる音楽表現の楽しさを味わうことができた。



LMS（Moodle）は有効に活用できた。



６　考察

質問14の自由記述において以下の回答があった。

学生指揮と先生の指揮を比べることで，先生の指導力は素晴らしいと改めて感じました。学生指揮にはない指揮の安心感があり，バンドの音色の変化も感じられました。わたしも安心して音の出せる指導者を目指したいと思います。

学生指揮を行ったのは良かったと思いますが，その目的が明確ではないように感じました。より多くの学生に指揮を経験させるためのものなのか，指揮法を履修中あるいは単位を取得済みの学生が指揮法でのテクニックを応用して指揮を行うためなのかが不明瞭でした。指揮者を音楽専攻生の3・4回生に限定するのか，全ての受講生から平等に募集するのかを明確にしていただきたかったです。

先生が現場でどのような指導を行っておられたのかを学ぶ機会にもなるので，先生の指揮でもっと演奏したかったです。

演奏技能と同時に音楽指導者としての資質・能力を身に付けさせる本授業の目的は理解され，また目標はおおよそ達成できた。

学生指揮による合奏については，指揮者の人選や教員による指導やフォローのバランス等，改善の余地があった。

なお，アンケートの全結果は，オンラインでも受講生にも公開した。

(https://reas2.code.ouj.ac.jp/reas/r/27067)